

看護基礎教育における看護倫理学の現状

清 塚 智 明

I. はじめに

看護職者は専門職として自らの行動を律する高い倫理観が求められているが、医療技術の進歩や人々の権利意識の高まり、価値観の多様化等により、看護職者は多くの倫理的問題に直面している¹⁾。水澤²⁾の1,746名の臨床看護師を対象とした調査によると、1968年の指定規則改正以降看護倫理という科目名称がなくなった後も、67.6%の看護師が看護基礎教育機関で倫理を学んだ経験があると答えていることから、倫理教育の重要性は認識されているといえる。しかし、倫理に関する知識の程度に関しては、91.1%の看護師が「全く知識がない」「あまり知識がない」と答えていることから、看護基礎教育における倫理教育が十分な成果を得ていないことが推測される。

そこで看護基礎教育における看護倫理に関する研究を概観し、看護基礎教育における看護倫理学の現状を把握し、今後の看護倫理教育の課題を明らかにする。

II. 看護基礎教育における看護倫理学の歴史

看護の学士課程における倫理教育の必要性が明確に目標として位置づけられたのは、2004年の看護学教育の在り方に起案する検討会報告「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」（文部科学省、2004）³⁾においてであり、学士課程で育成する看護実践能力の最初

に「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」を掲げた提言がされた。その後2011年には大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会より最終報告（文部科学省、2011）が出され、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」が示された⁴⁾。そのI群には「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」があげられ①看護の対象となる人々の尊厳と権利を擁護する能力②実施する看護について説明し同意を得る能力③援助的関係を形成する能力の3項目について具体的な卒業時到達目標が示されている。

厚生労働省も2007年に「看護基礎教育の充実に関する検討会報告」（厚生労働省、2007）において、看護師教育の現状の課題の中で「職業に必要な倫理観や責任感、豊かな人間性や人権を尊重する意識を育成していく必要がある」と述べ、専門分野Iを「看護師として倫理的な判断をするための基礎的能力を養う内容」とした⁵⁾。さらに2011年には「看護教育の内容及方法に関する検討会報告書」（厚生労働省、2011）が出され、看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標が示されている。このI群は「ヒューマンケアの基本的な能力」であり、構成要素の一つとして「倫理的な看護実践」があげられ、5つの卒業時到達目標が具体的に示された⁶⁾。

日本看護協会も2000年のICN看護師の倫理綱領に照らし、2003年に「看護者の倫理綱領」を示し、その普及に努めている⁷⁾。それに応えるべくほとんどの養成機関が、倫理を基礎教育科目として教授している。前述のごとく、水澤²⁾の1,746名の臨床看護師を対象とした調査

戸学院大学健康医療学部看護学科

により看護倫理教育の重要性は認識されているといえる。鶴若ら⁸⁾は、「生命倫理」の教育と比較する目的で、193校の看護学士課程の「看護倫理」教育のシラバスとカリキュラムの調査を2011年に行った。「看護倫理」を開講している大学は82校(42%)であり、科目目的は「看護倫理の基礎的知識の習得」、「倫理的感受性を高める」、「倫理的意思決定を学ぶ」であり、科目の内容としては、「看護倫理の基礎(定義、倫理的看護の基盤概念など)」、「倫理学の基礎と原則(倫理学理論、倫理原則)」、「倫理規定と法(倫理綱領、法)」、「方法論・モデル(倫理的ジレンマ、倫理的意思決定プロセス、倫理的問題への接近法)」、「事例検討(臨床事例)」を60%以上の大学が行っていたと述べている。多くの大学で倫理原則や倫理綱領、倫理的意思決定のプロセスなどの教授が行われていることが確認された。

III. 看護学生の倫理的感受性について

勝山⁹⁾によれば、2003年10月から2008年9月の期間の文献レビューにおいて、教育における倫理に関する研究は学生を対象としたものが最多(50/83件)だった。

学生を対象にした研究は、倫理的態度・対応に関する研究、②学生が感じたジレンマ場面の実態に関する研究、③学生の道徳的感受性の評価に関する研究の3つに分類された。

学生が感じたジレンマ場面の実態調査やMSTを用いた調査(太田ら、2004)¹⁰⁾では、学生は患者の利益を第一に優先し、患者の人格を尊重して自立を促すというように、患者の立場に身をおいて倫理問題を捉える傾向があった。そのため、患者に対する医療従事者の不適切な対応にジレンマを感じている学生が多くみられた。しかし、学生が臨床実習で経験したジレンマは、時間の経過とともになくなっていくことも報告されており(井出ら、2005)¹¹⁾、ジレンマ状況への「慣れ」が生じてくることが示

唆された。さらに学生は、臨床実習での経験の中で患者の立場に身を置き、倫理的問題を認識することはあるが、問題解決に向けての倫理的行動を判断できるまでには至っておらず、ジレンマへの対処過程レベルは低いことが示唆された(白神ら、2005)¹²⁾。

鈴木¹³⁾が行った2010年から2014年12月の期間の文献レビューでは、倫理的問題の感受性について菅沼ら(2010)¹⁴⁾は看護師養成校の3年生が、実習で倫理的問題と思った場面についての記述を分析し、多くの学生が教員から見ても倫理的問題と思える場面をあげており、学生は倫理的問題を感じ取る能力は高いと述べている。小野ら(2011)¹⁵⁾は、看護師養成校5校の卒業前の学生に質問紙による調査を実施し、学生は臨床の非倫理性や看護職者への不信感がありながらも、人権の尊厳とケアの方法を考えて実践力を高めたいと思っていると結論つけている。谷口ら(2011)¹⁶⁾は小野らと同じ対象に対して行われたと思われる調査から卒業前の学生5名の道徳判断の発達についてコールバックの理論をもとに分析し、臨床実習に行く時点では水準Ⅰの前習慣的レベルを習得している状況であったが、臨床実習中に倫理的葛藤を経験すると水準Ⅱの習慣的レベルに上がり、卒業時には自律的・原理的なレベルⅢに達したと報告している。しかし、指方ら(2012)¹⁷⁾は看護専門学校生(有効回答264名)を対象とした調査から、看護学実習の初期には倫理的問題と感じたことが、実習に慣れていくにつれて問題と感じなくなる傾向があると指摘している。看護倫理教育の現状に対する課題として荻野(2011)¹⁸⁾は、学生は「倫理原則や倫理的概念に関する知識の習得」、「臨床現場で倫理的問題が生じていることの理解」、「臨床現場の倫理的葛藤場面でのさまざまな価値観の存在の気づき」、「倫理的推論過程」、「倫理的葛藤場面での問題状況の分析方法」は学んでいるが、このような教育を受けた新人看護師が倫理的問題を解決する方向に向かえない原因として、ピーチャ

ムとチルドレス（1997）の倫理原則「自律，無危害，仁恵，正義」はそのまま日本社会に適用できるかという点を指摘する。また，事例で倫理的意思決定のプロセスを経験させたり，隣地実習の振り返りとして実際に行えなかった倫理的看護を考えさせたりしており，倫理的問題に気づくことができる能力を育てることはある程度できていると思われるが，問題の起きた環境の中で，検討の結果導き出した看護は，実現しうるのかという問題がある。荻野（2011）¹⁸⁾は前述の文献において，自己の倫理的価値観を属する組織の集团的価値観に齟齬がある場合に，自分の意見は主張しつつも，組織の中で落とすところを探っていく方法を持たない限り，倫理的葛藤を抱えたまま沈黙せざるを得ないことを指摘している。鈴木（2015）¹³⁾は看護職に対する研修や大学院生とのディスカッションの際，導き出された解決策が，実際に自分の所属する施設に帰った時に，医師や他専門職や患者，患者家族との関係性によって，簡単には実現しえないというつぶやきをよく聞くと述べている。研修を受けた看護師が，病棟での倫理的問題に気づき解決の方法を提案しても，問題の存在さえ認めようとしない同僚もいるという話を聞き，理想を語るだけに終わっては，倫理的な看護の実現には至らないことを痛感していると述べている。

IV. 看護倫理教育を行う側を対象とした研究

勝山⁸⁾の文献レビュー（2003年10月から2008年9月）では倫理教育の現状を明らかにした研究と，教員，倫理実習指導者側の倫理行動の実態を明らかにしたものに分類された。前者では十分な教育方法がない，教材がない，基礎的な知識に関しては教授できているが，倫理的判断ができるまでの教育には至っていないなどが報告されている。看護倫理に関する教育の必要性について，認識は高まってきているもの

の，倫理的判断が出来るようになるための教育方法について教員自身も模索していることが伺えたと述べている。

2005年から2010年の文献をレビューした高橋（2011）¹⁹⁾によれば，看護倫理教育の具体的提言としては，現在の実施されている「看護倫理」教育に対する危機感を持った内容が多くみられる。看護師が直面している倫理的問題について，倫理原則を看護場面に適用すればいいということではなく（高田，2009），看護倫理教育は，自分で感じて（感受性）・考えて（推論・判断）・動いて（意思決定・行動）・提案できる（コミュニケーション能力・社会的責任感）看護師の養成の必要性和継続教育の一環としてとらえる必要性があり（中岡，2008），原則や綱領ににげこまず，心の揺れに焦点をあてて意見を交しあう教育であり（荻野，2005），倫理原則や倫理規定を事例にあてはめて考えさせることでも，特定の枠組みや数段階のプロセスに沿わせて考えさせることでもない。重要なことは，看護実践に内在する矛盾を解明し，行為の是非を判断しうる思考力を育成することである（大日向，2005，2009）という，有機的な看護倫理教育の必要性が提言されている。しかしほとんどが展望に終始している内容であった。

鈴木（2015）¹³⁾では，多くの大学で倫理原則や倫理綱領，倫理的意思決定のプロセスなどの教授が行われていることは確認されたが，しかし，看護倫理教育に関する研究全体の傾向からみれば，これまでの結果と同じく学生に対する調査が最も多く，特に臨床実習での学生の学びを分析したものが多かった。教育の方法に関する研究は17件であったが，教育が明確な教育的意図をもって行ったものは少なく，臨地実習の振り返りの中に倫理的気づきが見られたという内容が多かった。2001年に看護倫理教育に関する研究において教育の現状について述べた稲葉（2001）²⁰⁾は，学生の遭遇する倫理的問題の実態把握に終始し，倫理的判断力を育成するための看護教育課程や具体的な教育方法に

ついでの研究はほとんど行われていないと述べているが、2001の現状と大きく変わっていないと鈴木は述べている¹³⁾。看護学生の倫理観の現状や倫理的判断の傾向について取り上げた文献は少なく、倫理的問題に関する授業前後の意識の変化についての報告が多かった。価値観がこれだけ多様化している現代社会において、看護職を目指す学生の価値観も多様化していることは当然であり、そうした対象に倫理教育をするためには、さらなる研究が必要である。

看護倫理教育に関する工夫としては、看護の現実をほとんど体験していない学生が、少しでも臨場感を持って看護倫理を考えることができるようにするための試みが紹介されていた。しかし、他の科目との関連については触れられておらず、せっかく倫理的な問題への関心を触発できたとしても、それを育てていかなければ、単発の試みに終わってしまうことが危惧される。

科目を連携させた授業の試みとしては、学内で倫理教育プロジェクトを立ち上げて各学年で倫理教育を行っているという報告(山川他, 2010)²¹⁾と臨地実習前に基礎看護実習の振り返りを行わせて倫理的問題に気づかせる取り組み(伊藤, 2014)²²⁾が報告されていたが、科目間、教員間の連携方法については記述されていない。ひとつの教育機関において倫理的態度を学生の中に育ててゆくにあたっては、教育する側が、どのような考えで教育を行うのか、教員間の十分な議論からは始める必要がある。

「看護師の倫理的行動尺度の開発」(大出, 2014)²³⁾、「患者尊厳測定尺度日本版の開発と信頼性・妥当性の検討」(長谷川奈々子ら, 2017)²⁴⁾など、これまでは医療者の感性をよりどころとするしかなかった認識しづらい倫理的問題を可視化するツールの開発も進められている。今後の研究成果の蓄積に期待したい。

V. おわりに

倫理学者の Myser (1998, Oxford)²⁵⁾ は倫理教育の目的は、① 学習者の診療や研究に関する倫理的問題に対する感受性を高め、② 学習者自身が自分の個人的職業的価値観や他の人々や社会全体の価値観について批判的に反省することを促し、③ 学習者に倫理的判断の基礎になる倫理原則や価値に関する前提をはっきり認識させ、④ 倫理的推論や分析法を授け、⑤ 臨床倫理的決断への体系的なアプローチ法を提供することだと解説している。

価値観が多様化している現代社会において、看護職を目指す学生の価値観も多様化しており、そうした対象に倫理教育をするためには、1つのアプローチ法ではなく、複数のアプローチ法を組み合わせ、教育を行うことが求められる。個々の学生について、倫理的感受性が低い学生に対しては倫理的感受性を高める教育、次の段階として倫理的推論や分析法の習得を教育し、臨床倫理的決断への体系的なアプローチ法を習得させることが求められる。教育する側が、どのような考えで教育を行うのか、科目間、教員間での連携を強め、有機的な看護倫理教育の構築が課題と考えられる。

文 献

- 1) 日本看護協会. 看護倫理
<https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/index.html> (2018.1.15 現在)
- 2) 水澤久恵. 看護職者に対する倫理教育と倫理的判断や行動に関わる能力評価における課題: 倫理教育の現状と道徳的感性に関連する定量的調査研究を踏まえて: 生命倫理 20 (1), 129-139, 2010
- 3) 文部科学省. 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標(看護学教育の在り方に関する検討会報告) 2004
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm (2018.1.15 現

- 在)
- 4) 文部科学省. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告 2011
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/47/siryo/_icsFiles/afieldfile/2011/11/04/1312488_5.pdf (2018.1.15 現在)
- 5) 厚生労働省. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 2007
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html> (2018.1.15 現在)
- 6) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書 2011
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200001310q-att/2r9852000001314m.pdf> (2018.1.15 現在)
- 7) 日本看護協会. 看護者の倫理綱領
<https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/rinri.html> (2018.1.15 現在)
- 8) 鶴若麻里他. シラバスからみる看護学士課程の「看護倫理」教育：日本看護倫理学会誌 5(1), 71-75, 2013
- 9) 勝山貴美子他. 過去5年間の倫理に関する研究の特徴と今後の課題：日本看護倫理学会誌 2(1), 77-86, 2010
- 10) 太田浩子他. 看護学生の倫理的感受性の変化への臨地実習の影響（その1）MSTを用いた分析：臨床看護研究 11(1), 3-8, 2004
- 11) 井出麻美他. 【5日間の集中ゼミナールで学ぶ看護倫理】5日間の集中ゼミで書き上げた「看護倫理Ⅱ・Ⅲ」の学生レポート「慣れ」により学生の意識が変化した事例の分析：看護教育 46(8), 671-673, 2005
- 12) 白神佐知子他. 臨地実習での学生の看護ジレンマ（第1報）看護ジレンマの対処過程と教育的対応：看護・保健科学研究誌 5(1), 181-188, 2005
- 13) 鈴木恵理子. 看護基礎教育における『看護倫理』教育に関する現状と課題 —5年間の文献検討から—：淑徳大学看護栄養学部紀要 1-8, 2015
- 14) 菅沼澄江他. 看護学生の倫理的問題及び倫理的判断能力に関する研究—臨時実習場面の振り返りから教育のあり方を考える—：日本看護学会論文集：看護教育 40, 48-50, 2010
- 15) 小野晴子他. 臨地実習で看護学生が感じる倫理的葛藤と教育上の課題：日本看護学会論文集：看護管理 41, 156-159, 2011
- 16) 谷口さゆり他. 臨地実習で看護学生が感じる倫理的葛藤と対処行動—コールバック理論に基づいて—：岡山県看護教育研究会誌 35(1), 11-20, 2011
- 17) 指方明美他. 看護学生の倫理的感受性に影響する要因：日本看護学教育学会誌 21(3), 37-46, 2012
- 18) 荻野雅. 基礎看護教育における倫理のあるべきすがた：精神科看護 38(2), 26-30, 2011
- 19) 高橋衣. 過去5年間の看護系大学における「看護倫理」教育に関する文献検討 東京女子医科大学看護学会誌 6(1), 81-89, 2011
- 20) 稲葉佳江. 看護倫理教育の課題とその内容構成の試み：教授学の探究 18, 145-161, 2001
- 21) 山川由加他. 本学における倫理教育プロジェクトとその成果—倫理教育プロジェクトは学生の倫理観向上に役立ったか—：大阪医科大学付属看護専門学校紀要 16, 33-41, 2010
- 22) 伊藤明子. 看護倫理教育のあり方と課題：畿央大学紀要 11(1), 1-7, 2014
- 23) 大出順. 看護師の倫理的行動尺度の開発：日本看護倫理学会誌 6(1), 3-11, 2014
- 24) 長谷川奈々子他. 患者尊厳測定尺度日本版の開発と信頼性・妥当性の検討：日本看護倫理学会誌 9(1), 12-21, 2017
- 25) Catherine Myser. How bioethics is being taught: a critical review, Helga Kuhse, Peter Singer ed. A Companion to Applied Ethics, Blackwell Publishing Grope, Oxford, 485-500, 1998